

唐〈杜嗣先墓誌〉著録の経緯

葉 國良

(高橋 継男 訳)

私は国立台湾大学中国文学研究所の碩士課程で学んだ時、孔徳成先生に従って金文と殷周の青銅器を数年勉強し、博士課程に進学した時にも、「宋代金石学研究」を博士論文の題目として、孔先生の指導を受けた。1979年ころから石刻資料の研究を開始したが、宋代の金石学の著作より資料を入手し、論題に関係する以外の個別の石刻資料を考釈する作業は、漢代の石刻から始めて後の時代へと手をのばした。1983年に博士学位を取得した（この博士論文に基づいて、『宋代金石学研究』（出土思想文物与文献研究叢書39）、台湾書房、2011年1月、刊行）後も、石刻資料の研究を継続し、1989年に『石学蠡探』（大安出版社）を出版したが、ようやく隋代の石刻に至ったにすぎなかった。しかも、大部分の個別的な石刻の依拠資料は著録されたものであって、石刻の拓本の多くは既に失伝していたり、あるいは実見することが難しく、これは石刻資料を研究する上で、言うまでもなく遺憾なことであった。

このため1989年以後は石刻を研究する際に、できるだけ拓本あるいはその写真版に依拠することとしたが、当時、台湾で毛漢光先生編纂の『唐代墓誌銘彙編附考』（第1～18冊、中央研究院歴史語言研究所、1984～1994年）が陸續と出版されていたので、私はこれに拠って研究し、「初唐墓誌考釈六則」と「初唐墓誌統考六則」の二つの論文を発表した（いずれも後に後掲『石学統探』所収）。しかし、毛先生編著の出版の進行が非常にゆっくりしているので、1991年には私の研究は行きづまった。大陸で編纂された『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本彙編』（全100冊、中州古籍出版社、1989年～1991年）や『隋唐五代墓誌彙編』（全29冊、1991年～1992年）など、拓本写真を大量に収録した書籍は、当時、台湾ではまだ読むことができなかったのである。私の研究は素材を提供してもらえないので、しばらく唐代石刻資料の研究を中止して、台湾北部の清代金石資料に関心を注ぐこととし、前後して「章高元献淡水龍山寺石庭記跋」、「張士瑜一行遊基隆仙洞記跋」、「嘉慶二十三年北関大炮銘跋」の三つの文章を書いた（いずれも後に後掲『石学統探』所収）。

1992年のある日、私と妻は私が指導している何人かの学生を食事にさそった。この学生たちは私の「金石学概要」の授業に出席し、私に従って各地に行き碑刻を調査していたのであるが、そのうちの一人が「私たちが行こうとしている食堂の近くの骨董店（寒舎）に、唐代の墓誌があります。ついで行って見てみませんか？」と言うので、私は「時間はまだ早いから、それでは行って見てみよう」と答えた。

骨董店に到着すると間違いなく二つの墓誌があり、墓誌蓋と序文をよく見ると、唐の徐州刺史杜嗣先夫婦の墓誌であることが確定できた。夫のものは大きく、夫人のものは小さく、その大きさは一般の唐の墓誌と異ならない。手で墓誌面上のほこりをふき取ると字跡はみな非常にはっきりとしており、一回走り読みただけで、これは本物であって贋物ではないことが確かめられた。その内容については杜嗣先が遣唐使に接見したという記載の他は、私はその時にはさほど大きな感銘をうけなかった。骨董店の番頭が言うには「もし購入をお望みなら、七・八萬元台幣でお売りができます」とのこと。私はいささか心が動いたが、当時の私の給料に比して高価であり、その上、かたわらで妻が「墳墓の中から出てきたものを家には持ち帰りたくないから止めましょう」と言う。それで購入は止めにしたが、私はペンを取り出し全く墓誌の形式どおりに杜嗣先墓誌を書き写し、夫人の墓誌は特別なところがあるように思われなかったので写しとらなかった。それから学生たちと食堂で食事をし、帰宅して私はそのメモを引き出しの中にしまいこみ、さらに二年これを忘れ去ってしまった。というのも私は当時、台湾本土の金石資料の研究にまさに熱中していたからである。

二年後、台湾でも大陸で大量に出版される石刻拓本資料集を見ることができるようになり、私はまた唐代の石刻資料の研究にもどったが、この時、引き出しの中の杜嗣先墓誌のメモを思い出し、取り出して研究してみると、メモ中の杜嗣先その人に関する記載と、敦煌発見の杜嗣先の著作『兔園策府』の残葉とを併せて討論できることを発見した。そこで自身が語るに値すると判断したことを記した小篇の考釈を書き、その他の七つの小篇と合わせて「唐代墓誌考釈八則」という論文とし、1995年、『台大中文學報』第七期に発表した。この文章は後に、その他の一〇編の論文と合編して『石學統探』（大安出版社）なる書籍とし、1999年に出版した。

〔訳者説明〕

上の訳文は、国立台湾大学中国文学系教授・葉国良氏が訳者の要請に応じて送ってくださっていた中国語の文章を翻訳したものである。訳文中の（ ）内のデータは原文にはなく、読者の便をはかって訳者が増補した。

葉氏は、2008年11月22日に専修大学東アジア世界史研究センターが開催した「古代東アジア世界史と留学生」第2回国際シンポジウムに招かれて、「二重証拠法からみた『日本』国号の中国における出現」と題する講演をなされ、その中国語原文および丸井憲氏による日本語訳文が本誌『年報』第2号（2009年3月）に掲載されているので、ここであらためて葉氏を紹介する必要はなかろう。

訳者が葉氏に台湾大学の研究室で初めて面会したのは、2005年7月26日のことであった。その前年の10月に「井真成墓誌」（734年2月4日葬）の発見が公表され、日本で大きな反響をよんだが、新聞報道などが「井真成墓誌」に注目した一つは、墓誌に「国号日本」と記されており、この「日本」は実物資料としてはそれまでのところ最も古いと見なされたことであった。しかし、葉氏が1992年に台北の骨董店で著録し、1995年に論文で発表した「杜嗣先墓誌」（713年2月2日葬）には、杜嗣先が「日本」の遣唐使をもてなし面談したことが明記されていた。訳者は葉氏の論文を再録された著書で読んでいたので、国号「日本」は「井真成墓誌」より早く、「杜嗣先墓

誌」に出現することを指摘し、専修大学・西北大学共同プロジェクト編『遣唐使の見た中国と日本―新発見「井真成墓誌」から何がわかるか―』（朝日新聞社、2005年7月）に収められた「最古の『日本』―『杜嗣先墓誌』の紹介―」を書いた。

しかし、「杜嗣先墓誌」は葉氏による録文で知られるだけであるので、この拙稿を台北へ持参し、葉氏自身から論文では分からない本墓誌にかかわる事柄を直接教えてもらおうとしたのである。なお、この面会は台湾大学歴史系教授（現名誉教授）・高明士氏に仲介していただいて実現したものであった。この時、葉氏から、墓誌原石は葉氏が骨董店などにいくら問い合わせても行方は不明、墓誌の拓本も持っていない由や、骨董店で発見し著録した時の状況などを詳しく聞くことができた（『朝日新聞』2006年1月10日夕刊の「単眼複眼」欄に、『『最古の日本』記す墓誌、台湾に存在か、古代史解く鍵、探索続く』の見出しで、渡辺延志記者がこれを報告した）。

その後「杜嗣先墓誌」は、日本史関係の各種論著で最古の国号「日本」の実物資料として言及されているようである（たとえば、小林敏男氏『日本国号の歴史』吉川弘文館、2010年、61～62頁）が、遣唐使に関する記述を含んでいることから日中関係史方面で利用され、また特に則天武后期にかかわる貴重かつ豊富な内容をもっているため、唐代史方面でも注目されている。これらの研究には、たとえば森公章氏「大宝度の遣唐使とその意義」（初出2005年、後に同氏『遣唐使と古代日本の対外政策』吉川弘文館、2008年、収録）を嚆矢とし、金子修一氏の一連の論文とこれらをまとめた同氏「則天武后と杜嗣先墓誌―粟田真人の遣唐使と関連して―」（『國史学』197、2009年）、伊藤宏明氏『徐州刺史杜嗣先墓誌』雑感（『鹿児島大学法文学部紀要 人文科学論集』63、2006年）などがある。

一方、「杜嗣先墓誌」は葉氏による録文のみで原石や拓本を確認できないことから、また訳者が紹介して以後5年を経ても原石や拓本が出現しないことから、その実在や信憑性に疑念をもつ向きもいと仄聞する。上記したように、葉氏に面会した時にお聞きした、葉氏が「杜嗣先墓誌」を著録した際のリアルな状況を葉氏自身に記録していただき、本墓誌の出現を今後待つのも意味のあることと思い、高明士氏を介して葉氏に執筆をお願いした。高氏は間もなく『唐徐州刺史杜嗣先墓誌』諸問題答客問」と題して三章からなる約3200字におよぶ葉氏原稿を送ってくださった。しかし、訳者が日本語への翻訳に手間取っているうちに、上に述べたように2008年11月のシンポジウムで葉氏が講演され、その内容の一部分は頂戴していた原稿の第二・第三章と重複していた。そこで今回、訳者の一存で原稿の「一、著録因縁」の部分のみを訳出することとした。早くに原稿をいただいていたにもかかわらず、訳出が遅延したことと併せて、葉氏に心からお詫び申し上げる。訳者の説明としていささか長くなったが、本センターの荒木敏夫・矢野健一両先生のご厚意により、本稿を掲載した理由と経緯を述べた次第である。